少年と秋の日

小川未明

青空文庫

もう、ひやひやと、身にしむ秋の風が吹いていました。原っぱの草は、ところどころ色づいて、昼間から虫の鳴き声がきかれたのです。

正吉くんは、さっきから、なくしたボールをさがしているのでした。

「不思議だな、ここらへころがってきたんだけど。」

どうしたのか、そのボールは見つかりませんでした。お隣の勇ちゃんは、用事ができて帰ってしまったけれど、彼だけは、まだ、思いきれなかったのでした。ボールがほしいというよりは、どこへいったものか、消えてなくならないかぎり、このあたりに落ちているものと思ったからです。

この広い原っぱには、ほかにだれも遊んではいませんでした。彼は、勇ちゃんが、スパイクを買ってもらったら、自分もお母さんに買ってもらうお約束があるので、さっきも勇ちゃんと、その話をしていたのでした。

「ね、君は、いつスパイクを買ってもらうの?」

「お父さんが、旅行からお帰りになったら。」と、勇ちゃんはいいました。

「君が、買ってもらったら、ぼくにも買ってやると、お母さんがいったよ。」

二人は、早くその日のくるのが楽しみだったのです。

正吉くんは、いまも、そのことを考えていると、ふいに、

「君、なにかさがしているの?」と、後方で、声がしました。おどろいて振り向くと、知らない子が立っていました。

「りゅうのひげなら、あすこにたくさんあるよ。ぼくもりゅうのひげの実を取りにきたのだ。」と、知らない子が、いいました。

「りゅうのひげ?」

「ああ、りゅうのひげさ、君、まだ知らないの?」

「僕、りゅうのひげの実を見たことがないよ。」と、正吉くんはいいました。

知らない子は、先になって駆け出しました。

「君、ここに、こんなになっているだろう。」と、足もとのしげった草の中をさしました。そこにも、冷たい秋の風はあって、細くて長いひげのような草の葉を動かしていました。

なるほど、手で草をわけてみると、濃紫の小さい美しい実が、重なり合うようにしてなっていました。

「僕の妹が、ほしいというので、僕、さがしにきたのだ。」と、知らない子は、いいました。

「君は、りゅうのひげの実を取りにきたのかい。僕は、ボールをなくしたので、さがしているのだ。」と、正吉くんは、いいました。

「そうか、あったかい。ないの? 僕、さがすのは、とてもうまいんだぜ。」

知らない子は、りゅうのひげをポケットに入れて、それから、ボールをさがしてくれました。

「なんだ、ここにあるじゃないか。」と、さっき正吉くんが、いくら、さがしても見つからなかったところから、拾い出しました。

「君、キャッチボールをしようか。」と、正吉くんが、いうと、

「うん、こんどしよう。妹が、待っているから、早く帰らなければならないよ。」

「君の家は、遠いの。」

「遠いけど、自転車に乗ってゆけば、すぐだ。君、いっしょに遊びにおいでよ。」と、知らない子は、誘いました。正吉くんは、その子は、いい子だから、お友だちになりたかったのでした。

「どうしようかな。」と、ボールを握って、考えていました。

「僕、帰りに、送ってあげるから、おいでよ。」

正吉くんは、ついにゆく気になりました。その子のそばには、真っ赤に塗った二輪車が、置いてありました。正吉くんは、知らない子のうしろに乗って、肩につかまると、風を切って、風のように、その自転車は走りました。いくつかの、まだ見たことのない森や、まだ知らない道を通って、やはり原っぱの中に、五、六軒あった、その一軒の前に止まり、庭の木戸口を開けて、二人は、入りました。

「ここが、僕の家だよ、あがりたまえ。」

庭には、はげいとうや、しおんのような、秋草が咲き乱れていました。中にも、うす紅色のコスモスの花がみごとでした。縁側の日当たりに、十ばかりの少女が、すわって、兄さんの帰るのを待っていました。その子は、病気と思われるほど、やせていました。しかし、目は、ぱっちりとして、黒く大きかったのでした。

兄さんは、ポケットから、りゅうのひげの実を出して妹にやると、

「まあ。」といって、顔を上げて、喜びました。正吉くんは、なんとなく、この兄妹の仲のいいのがうらやましくなって、自分もいつか微笑んで、二人のようすをながめていました。

「新しい、お友だちをつれてきたのだよ。」と、兄は、妹にいいました。

「これから、ときどき、遊びにきてもいい？」と、正吉くんが、ききました。

「ええ、道をよくおぼえていて、いらっしゃいね。」と、少女は、答えました。

三人は、その日のよく当たる縁側で、りゅうのひげで、おはじきをしました。

あちらの壁に、海を描いた、油絵がかかっていました。白い鳥が、波の上を飛んでいました。正吉くんは、どこかで見たような景色だと思いました。あるいは、自分が生まれる前の世界であったかもしれません。そのそばに、マンドリンがかかっていました。

「あれは、マンドリンだね。」と、正吉くんは、珍しそうにして、指しました。

「わたし、マンドリンひけてよ。こんどいらっしゃったら、きかしてあげるわ。」と、少女は、正吉くんの顔を見て、笑いました。

「あ、僕、もう家へ帰らなければ。」と、正吉くんは、急に、お母さんが迎えに出て、自分が見つからないので、案じていられる姿を目に浮かべたのです。

「今度、キャッチボールをしようね。」と、知らない子は、いいました。そしてまた、自転車のうしろに正吉くんを乗せて送ってくれました。雲の間の夕日は、赤かったのでした。

「僕、君を呼びにゆくときは、スパイクをはいてゆくから。」と、知らない子が、いいました。

その夜のことでした。

正吉くんは、ふと目をさますと、外のアスファルトの往来をカチ、カチと、スパイクの鉄を、石に打ちつける音がしました。

「あ、あの子がきた？」といって、飛び起きました。このようすを見た、お姉さんが、

「正ちゃん、いま時分、だれがくるものですか、耳のせいですよ。」

といわれました。

「カチ、カチ、いうじゃないか！　姉さんには、きこえないの？」

「ほんとうだわ、見ましょうか？」

二人は、窓を開けて、外をのぞきました。澄みわたった、月の光に照らされて、さながら、水の中を見るような往来を、一人のスパイクをはいた子供が、駆けていました。

「だあれ？」と、正吉くんが、叫びました。

「正ちゃん、僕！」

それは、意外にも、勇ちゃんの声でした。

「勇ちゃん、どうしたの？」

「僕、スパイク買ってもらって、うれしいのだよ。」

そういった、勇ちゃんの声は、たしかに、うれしそうでした。

「まあ、いま時分、どうしたの？」と、お姉さんがいいました。

「お父さんが帰っていらっしたから、お母さんに買ってきてもらったのだ！」

「じゃ、僕も明日買ってもらおう。」

二人の少年は、月の光を浴びて、朗らかに笑いました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　10」講談社
　　1977（昭和52）年8月10日第1刷発行
　　1983（昭和58）年1月19日第6刷発行
初出：「児童文学」
　　1935（昭和10）年11月
※表題は底本では、「少年《しょうねん》と秋《あき》の日《ひ》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：仙酔ゑびす
2012年7月16日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少年と秋の日

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/